

清 代 之 江 条 川

花そめ下

コノ



花ゆう

ひんち

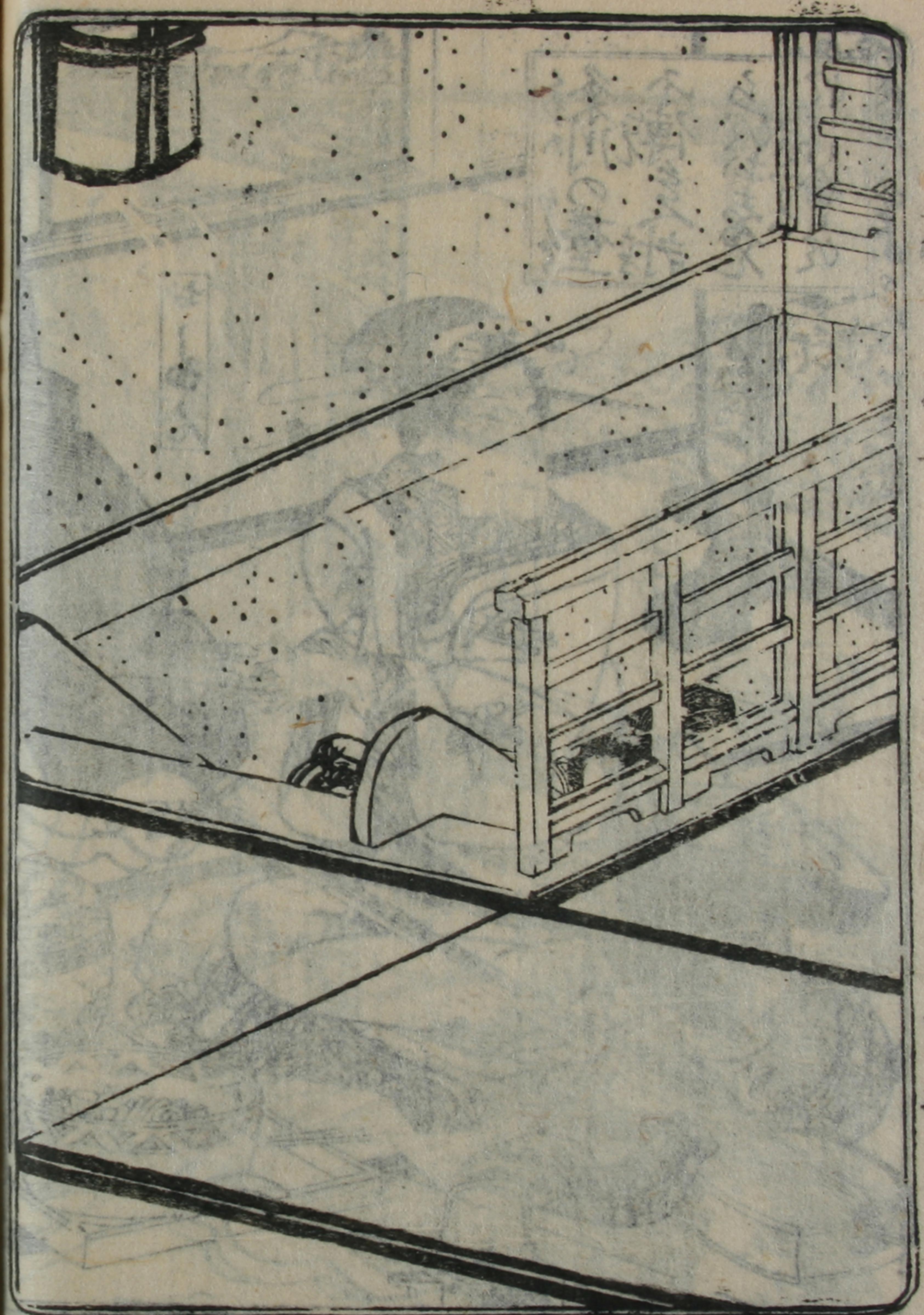
ちあん



糸引の壁
小傳之井

らびお堀
さわよひ
に再會





浮世
新歌

恋の花曾女初編下

東都

松亭金水編次

第三回

八街小往々入る跡。見えざる。その頃△ぞ二國一と。
名小笠。花水橋。表ハ二間の松。内ハ二間の櫻。
ヨニ桟ヤ。と白く。發。△の龍。本の。猩々。翁の。真讀。セ。
そのまゝ此がよ摸。と。う。東吳万里の船。と止む。と。
柱。か。の竹の。茎。根府川石の。沓。税も。ひと風流。

の廊のりまがくとてあえますや三つとゆきで名
うその伊妻男いよめおがこの唄女うためのわを中なかへ此こと計
らず也ゆゑ。お後あとへ標致ひうちのよしのとくらび。藝げ文
人ひと小勝こちゆ。弘ひろめ良らう其その日ひ。院いんの絶間ぜつまを充
のきう。祝のぶ否めの教きょうも重きずみみが三さん八はと互ひぞ。よきこ稱めい
我わ樹じゆを私わたくふうふうとひの内うち小歌うたびて外ほかの孝こう
よく痛いたり。出遠入でとんおきへとつけと。衣裳いじょうも足あしに
かかからぬやう。わざわざの手てで外ほかをす。世せ界かいさうやを小

ひ
日ふそひて。益々流行りゆゑる。さてお後へとの
間國すも奈川にて。福住やの傳をよ。再會
あて身のうへとも。語らぬやーと。うへど。相
客のをまへと。ゆき。語らば歸るにしが。薄
ゆが今のもや。を。續と訖言ひ。中暉ほく暮
す。人のむと秋の空かく。習とひのう。あれ
やどす。小乞宿と。簾ひ。うども夫婦とあり。謂ふ
ま。まよ。あよ。ふそひて。枕あい。ぞ床のうちも。いを可。毛

の言ひ善ひ。あくとも互に憎むべ時もゆふも
女夫中。て物どん素。まへぬ。さまでアタ
傳えき。りよ隨へ嬉戯ることを。あらがふ
も納ます。紫とくも若本あめ。故
ゆる。伴さきて。ツイ肌とわじて。大きは。登き下
あらそであらよ。りう一世話ふもろくと。お露
て。元伯母さん。苦勞うのう恩を。お取。おう
ゆあれど。助あつて。結つ紫のあらゆる。

まへ去あへ。傳ええん男根あへむ。何一と
そ不足。や。や方がア。あ。やをふ。情と實と義理
づりふ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
きを。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。
きを。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。
れ此月の。は。苦。勞。こ。主。も。主。張。恩。の。あ。る。ア。ノ。伯。
母。え。の。お。家。づ。ち。す。と。や。そ。と。計。ア。ト。そ。と。身。あ。う。と。
わ。ひ。い。き。う。届。く。で。あ。り。ト。往。く。物。そ。と。折。う。
入。梅。の。病。と。と。軒。よ。音。せ。の。雨。の。あ。行。く。入。

も。のまふ。雲妻時。経度の口庵菴とあけく
入る人あり。此物の小ぢしく至多て。ナハイ。且自ら
ト、アタマを。年。の。久。甲。ゆすりの。女。ゆて。丁雅
よ。負す。祇。む。自身。も。匂。花。紅。東。紗。女。そ。の。二。舞。や
で。ご。ざ。う。す。う。ナ。ハイ。ざ。ろ。も。う。く。女。と。の。う。も。手。ア
お。後。と。り。よ。唄。女。が。居。る。と。う。ど。ま。う。歌。聲。と。う。そ
れ。か。よ。今。お。お。見。ん。内。小。房。み。ハ。仕。ま。ひ。と
そ。て。居。る。も。の。ま。す。女。そ。を。あ。キ。キ。仕。ま。せ。う。ト

行ふ。客室へ入り。わざと急ぎまくろみ。
ハ先へ並び。おもあんが斬さなぐと低語へ。おもあんは女
の圓俗えんぞくと笑わらよりハット泊車泊車。若もそま子と振
む。町へおもひり来る。以前の女。自まことに食くてそこ
もおもんもん。身からだもつた。母めのアリ伯母伯母。元もとぞじてま
えへこどりして。ものあい物ものあいもの。よくこまの性やまと。どうあつてのま
傍そばよ在食くう。煙管きせるを搔かと。腰こし夫めと
二ふた三さんうまも。拂はらはも。おもととおもち散まぶ。

お志もんハ此方こみかへ身みと俊巡しゆじゆもアレもアレとえお腹はらの立たつハ
無理むりであいが。毛けあべざざくくヨウケケのあつとままくく 静じやう
ふふとと下さきき。傍わき輩び元も波なみ奴やつよ居ゐます。ササの根ね
小こ説説もあいが人ひとを打うちてう擣うちてうああままううトトひひを
ももああいがととええ。手て押おのつづよよ女めををぞぞよよ。餘あううととへへるる
ああままうう。毛けのの毛けうう畜ちく生せいふふ。物ものをを言いつつももううううまま
ゲゲ。一一下げ毛けううハハ毛けふふををああるる。奴やつををももううととがが血けとと分ぶんご
姪めいごととうう娘むすめ。同だ母もうう。狀定じょうていや慈母じゆぼが死死んでての后ご

引とくまゆ此處へ、まづ大抵の所の。お娘さまでも
お走りへあがみ。攘鼻袴うそ足袋までと袖ぐもの
切ききえのも。立ちともねくと日ふ二三度かけゆく。要
はきくら。もよゑとつりく畜てあひて。佛のめのる
理もあり。二年のうち相應ゆ。町へ縁と組してしまふ
と。荒い風もあてわくやうふ。もともとやくとかひと
がまぐら。う氣よあつてコレえど。まご此も尾び温こま
う。温こまうふを恋ご。まづ里をけります。ま

のとあまがす家をとして。人みへ見えざる氣を擡せ。僅う
十町。二千町の所ふかく。あを自。男(だらう)内
つゝ。通て。雨のとや風のとや。やふはれて。よませとも。ま
けり。とてとも。わゆる。まごり。きく。もあらん。まく。せうせ
もあ(あ)のゆく。ざうじても。朝でも。すぶ。いづ。遊
き。五脩一人。あざと。よの。下傳。きく。遊。一きいとを
あらう。げ。まづ。色絹。も。娘。令。て。是く。吾脣。も。染
ふ。あつく。お詫。年。や。祝。の。酒。歩。内。也。優。こと

あまふと名ふ。尔傳。之。尔期。りよ。大き。み。虫。が。つ。き。逃
か。く。ま。す。こ。も。走。り。わ。い。現。在。伯。母。や。後。弟。女。ま。下。人。で
さ。う。」。小。极。す。宣。此。蔚。家。宅。へ。ゆ。も。反。つ。て。夜。の。因。も
隣。く。窓。ま。る。の。志。多。せ。え。ア。見。る。驚。く。も。大。如。す。苦。惱。し
て。傳。え。や。も。ま。と。う。争。う。小。幸。ま。す。ハ。ー。の。黒。う。え。と。も。を。
そ。う。ご。づ。ナ。二。馬。の。耳。尔。お。念。仏。も。り。斗。り。と。可。能。ざ。そ
き。猪。ゆ。か。ま。ひ。つ。け。も。ど。他。人。ふ。劣。く。そ。う。扱。ひ。姫。合。ト
ても。三。月。裁。ツ。イ。よ。一。度。失。婦。ツ。リ。よ。す。も。あ。い。そ。ア。ノ



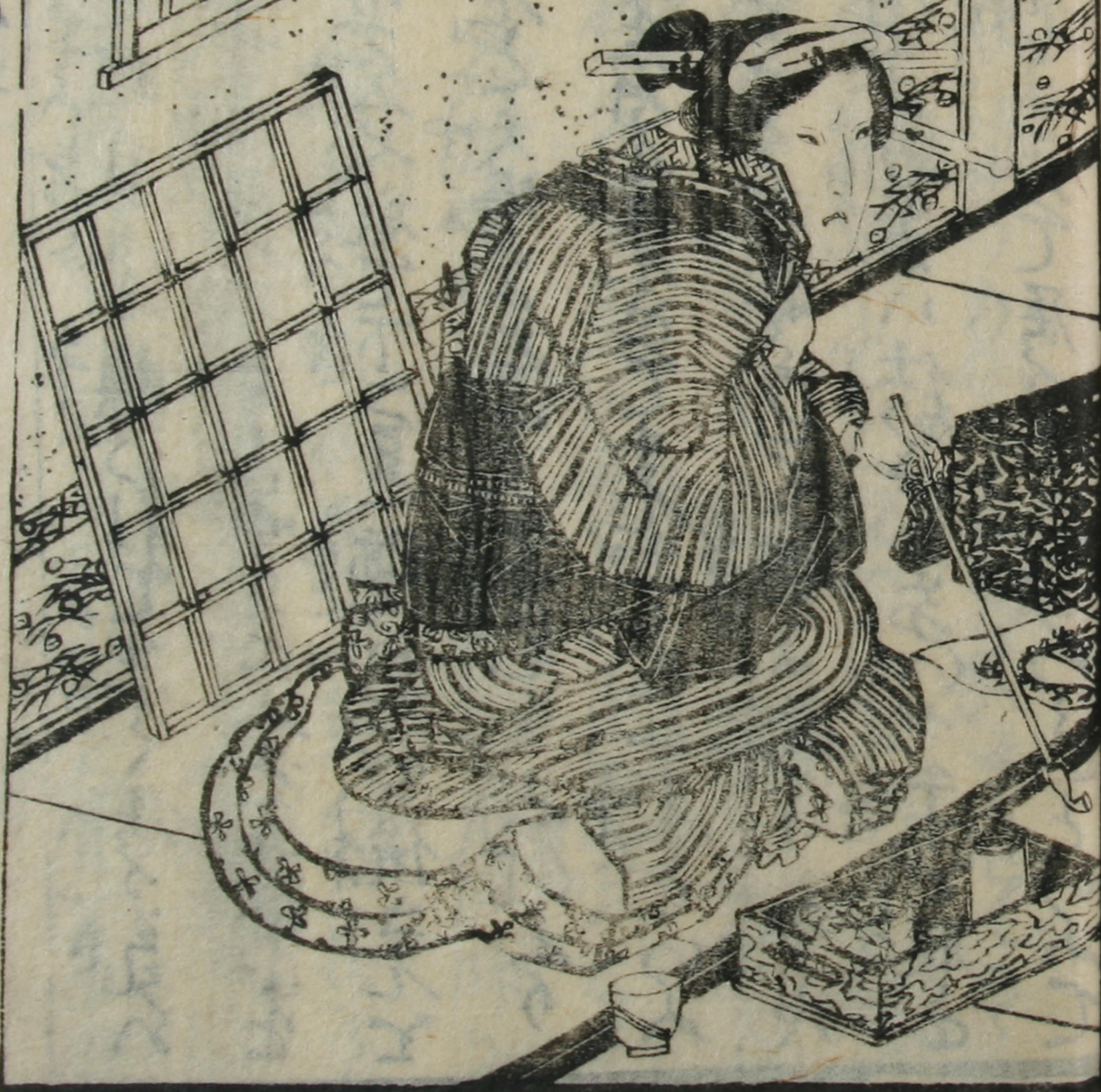
むた家

謹言と信ん

じて於くゑ

阿俊子

追致



児こ下さあびき。連配つまよ良人ちよと小嫌こぎりれ。生いき居ゐる氣きへ
きのりきのりど。鄰ちか小先さうせん不幸さくわととぞ吾われ爵そくを
娶めゆ。松葉まつば谷たに送おもて下さき。而ま後あとええと
いは。傳つたえと夫婦ふうふよき。家宅いぢやもよがう
御ごすけ。まき。まえがづき。他人うりととり
でもあいのりととどうぞおきじて穏なまよ。海うみすすああべ
海うみせよ。吾われ爵そくが苦勞くるらハ仕つかむ。もあいが。手て取と
ま人の死死。傍そばよそにて居ゐる吾われ爵そくうまいととりよて

一入ハ良人の事。仕やうむをもぐまひません。ま
是れなく吾偏ヨミナの尼ニシよとと既モテの事。小刺刀で醫ヨシを
あらうりアラウリ。もらう事ヨリと。多くヨク傍ヨロてと漸ヨハスくヨハスもて。今
そもそもへをヨリ。傳ヨリきの處ヨリあるより甚方ヨリへてを
生ヨリき人ヒト。號ヨリ少ヨリたるヨリ。卷ヨリの。也ヨリして尼法師ヨリ
さきヨリ。自ヨリとヨリ。傳ヨリきふ。驚ヨリ。里ヨリ。之ヨリ
をヨリ上ヨリ。おもんざヨリ。をヨリまう。由ヨリよ連死ヨリ。予簡ヨリ
あ。又ヨリ。文ヨリ。も。あ。お。も。孤ヨリ。づ。も。き。と。も。吾ヨリ

仰ぐ異見と用ひらず。叔父の方へ
及て外の聟アラシともあらぬものも無
き。徳多小功ちのまをきく。かくへと
団扇トクサン下育モモテと申す。是を參ミテる。他人トコモとあるは宜だ。
むりとするのも可ヤハ。忍タケルせよ。ま
篤カタマリり黒マツキえて。その上アベでのう簡カヒと腰ヒダをきめて
侍ムサシ。小勦スモウとゆき。あ。そ此コトの家カミ筆ヒツも納ハセバれ
迷マジる。うちの八百人ハチヒャクジン。どうぞ爰ヘビを勘カズして。お俊ヒカル

がる。身大切て下さる。いもぐもあらんへ畜生
同せん。ちくせう。ちくせう。畜生ちくせう
間。そよりあづけりき。性根せりねをいよ。真
まゝ人ふ。あづくことやきぎ。よ。安堵あんど
養やむあづく。よ。まよ。の世間せきんの人の親おやぢふ。
子の可くわい。考かんれあれ。きみあづき。と。歌うた
主ぬしひよ。吾われ身みすむ。ア。ど。あざれうと。歌うたえす。
今。其方そのがたも家督けとの身。この家このいえと寐ねうそうと。起

そきと其方の物。うづこ一ツふあまゆざと。現在
聟の傍そば。とさげぬよりはてひく所ところか
せらう。まぐるの面おもての憎にくと。こまく怪けく
ゑをわつとあります。先にも免めんぐ家出いりにて。
その后終すうよ自じまま。まごう年としせぬ況むしろ
そきよ有情ありあどだ。神かみうそそきりませんくく。
些すこともおぢれぢれ立た。立た漣れんがふいひぬけ
れ。鶴つるさむやくやくいが聟姑きのこと宣せん寧ねいをしても始はじま

らあへら。わらふうけてきそくのやうある。其處よ
虚うそもあさまうそい偽うそもあさまうそいあれと色緒いろおきと見て
夫婦ふうふはするはりで。生皇子まきこ甚まことに方かたのと女兒めのこ
もよく年とどろはふ。あくこ故ゆゑよ姫合ひめあつて。もううきは
三月越さんげつ。観もやのくわいし憎にくい。は徒むかみきと色緒いろおき
とく終しつふ一所ひとしょ病びやくもあまうそいとゆ。史しあれて行ゆき
訛なまりがあらう。標致ひょうぢのあらうえよゆくゆく。外ほかよ孤こが
れゆきてうる。二にの内うちごひへまへが。そきでんせきまへ

も
済りせと。同宿主も。さうぢと。分らぬ
あまう
旅、授だりて。小ちまく。そあわく。あく
ふをとて。そと。漸く。うざきて。走つて。
すり
面と。思とも仇すて。逃げ。ゆびと。
ゆめ
りよ物の。元と。うき。甚ぞの。反対も。丸と。
ごとくも
此ぞの。山亭主。ふかひ。合て。誰口い。まぐで。欠落者と。
こうち
抱へきよこと。此方と。やうの。されど。コノ伯母と。
こう
望小一と。ゆき。甚方の。是れ。どうでも。もとど

り。構へりけりやア氣も搖れへづ。すづさうあつて
ヨリ下が迷惑。さうぞおまゆん侍と。かのうち
うちから切く下せき。ト四をばやく重ね疊てえん。
口より泡を吹かしてさも憎てて不思ひ。此うち
おあゑんの言葉もあく。さう傍て居ころう。始終と
笑て怕じ。さうあふれど因恩よろづまこと仇よ
り下で出ます。わざ重くヨリのほど。それふれ
申すがもあり。實は心の氣で出すこのをまの

日暮おぢ情よりより命も助かり此をうふ花美の衣
裳を着て上表の聲あひきふとても内記の
苦患のゆすれをれど是もお法恩を仇ふ。
穀ひつと明らかて居ますわどアモゲムヤシ
てアケヌキえとそあアキノのゆづ有チナスウル。
一ツ所よ居て時々ヌ。ひめで暮と吾翁のゆ況て
家出とあき二戻りあやかうこゆもあ(アト)そ(アト)そ(アト)
ハヒタキスル活業ざうの口功考よ佐(アト)も(アト)言む

そくへましん。まづ第一伯母の家と少落さりてござ
ひよけ殊ことよふと覺おぼる。出ですと人のの
事ことど。吾われの仕つかいが氣きよつぬのことも立たてたれ
情じやう即そくてもあそこのところを立たてたれたるを
傳つたえといひ合あわせ。もととさく立たれたるを
事ことむ積たまり。さとの亭主ていしゆがさくらん。情じやうのあけ
人ひともさう。請うけ人ひとあとの奉まつふ人と抱いだる者ものもあく
ます。さるさると傳つたえた。をと今いまこじか減まろ

シタがそりや呈^{アガル}あら。今までのものへ取て捨て是
うち后^{のち}へ作^{ハシメ}まふ。宣^{アマサ}まわへとつよ書付^{シテ}と一^ハあで
書^シて貰^ヒひませり。吏^{シテ}あまぐ吾脣^{モコ}も安堵^{モカ}ぐ。モミ
でもわあ之方^{アツカ}入^{ハシメ}中^ハ。切^{カツ}きもゆきゆき仕^{ハシメ}方^{ハシメ}がうい。アノ
侍^{シテ}まざべ西^{ニシ}の海^{シマ}。梵天國^{ボダジ}ナマラウと返^{カム}舞^フみの
ヨリ^{シテ}サ^ク切文^{カタハガ}ともよと一筆^{シテ}書^シて呈^{アマサ}ト在^{アリ}祝
突^{ツカ}けられ^キ十方^{ハシメ}。モ「实^ス不^シ幸^スのあつとま
私^{シテ}少^シすまえも乞^カく。苦勞^{カツラ}とあもろとあも

らの事とへやすせう。まことに此方ふるさ
切文と書ませう。まごちの女めへ彼是こと言ひ
ありそめんぞうふく亭主にかけ食を二文
一所ふ索うくげ。知縣所(引)きりどり。自イ
やせうト立だすとあも(も)もすすも滅そうふにと
姫柳よ公家河汰ミ、盜人獮(くわい)ひととくわいのゆ
姫柳のあとのと伯母小向(おむか)りそ殺(さつ)して能(の)きぬト
怒(いかり)の面(おもて)色(いろ)如夜叉(やくしゃ)の真相(じしやう)明(あらわ)り狂(きみだらけ)が傍(わざわざ)非(ひ)事(こと)眼(まなこ)女(め)

詫へぬとも分らぬと云ふととぞと謂
かくもあらう。かくお後づひのうちほんく是と
是量ふ。身の量をき濡衣と多うべつやく厭、
れどこの切文を書とた。虚言へ勿比実言とす
咎き人ふ罪と負するを知りまどて若書ず
伯母が勢ひ娘あざそ。公家沙汰によると云へば
をよ取のうをあげと云ひ定ふ乞績が良人と恃む
傳多びふ。兼い主てゐ悔りませれ。此のうと云ふ

母おやぢ小説言ごくわんごひうりのまゝ、畢竟ひきよう伯母おやぢの家いえ大おほすと。
とちがちがともあま身まみを憲けん。ひ細ほそくも住すまし。家いえ
生うる身みあらゆの世よ小こあき物ものととての景けいを語はなふ
さうらす厭いやふざき。伯母おやぢの望のぞみまじつ。元もとより有あ
廣ひろき傳つたえとと。切文きりもん書かくて渡わたしてやう。その男おとこの
いじりといじりあら。ウウさとと胸むねのうち。沈ひづの胸むねを堅かた
めう。急化ききか完年わんねんとうち争あらそひ。もももをさえりうくと。
としてお腹おなかとえせとのも実じつとりべゑの毒どくをく。

うきよ



白人春画

でんきへ





彼の蜀のとやぶ。実へにと傳きまえの中へ取

りゆまてみて。めぐらしありあが。うちのまう

見ぬ月の圓果。情思して下まへま。モウあつ所

呉ひきり。是れり身もアキラメ。モ望み。モり切

文と。サク書てあげます。甚くうれし。心等す。

傳きまえの身の上ふ。障らぬ。身を教へ。ト笑て

おえも。顔紅か。づげ。そち物。ナゲ。ワニ。ト

りの障り。あらわす。忘却のちのとび色く。お

ぐりづこうち。此方いちらも意図いぢうをばら。荒あらざう訣けつ。う。す
わざとわざとするゆりふ。あそび吾われ孫まごが鬼きでよ蛇へびでも、
突つきからまう物ものでよき。其その文ふみ書かてかせせす。
侍ひしままあも黒くろええ。いよいよ二人ふたりが切きまうあす。可うそ
娘むすめよ死死せせ侍ひし。憎にくらら詫ことごう。甚ひなめめ些さとも
事ことどと言い葉はかからら。おおええが自じ。尼尼ニがおお。
りりが情きみや。鬼きののももかかたた露あららももり。繋つなくくの
あきあきととああり。身みよ。書かも浮うき世よのの理りばばああまま。

あつまし此文と書ひふるべ誠の事と。おゆひ
まへせど一寸も延引あるぬこの場の馬仔。麻耳を
まへたまうく小机つまに描やう石の画かふあづけ
墨と紙白イ事ことハ天照あまてらすと神のありてやむす
らんと不覚まづら不拘まきよ囁ささ走き。洞飲ののて。すがて深ふか
あす筆ふのさん。今宵よ小せきう命いのちも。但ただしは
えらひゆく。漸よく小書かずあまし。渡せばかえハ披
き下おく。独ひとり点改ほりそとよ。暇ひまと告ごて主おひ。一雨

のうち少傳き。物讀居るを兼らう。ゆきせ
く頬そらに。こむかまくとへ一向有情へ
ごぞりません。勿論あぬ時ハ如何お居る。もとを
昨日言ひまとう。実ふそもう。うそ
ませう。えラム慥き。証拠があづき。うそ
ひやう。存じませんが。私よ歎き。えちあらんの
居ふとおぬのぎやの。ほへりえ。うそとてゐ強。寢男
吾脅と女と侮りて。ち事ふよももう。其く

性ませもぞ。サアその 記念とコトヤマト 懐す
こそとりぬと切支きみニコニコとせん人傳伝まくをもん
とある。とおもひ歸もどかへねが、あらへいひさみさう
とうち披ひき「是まで歸もどせ」。二人があつて
伯母おやぢさまのお孫ごとあつはりごそく私わたくしはいづ
ともるの切きりをせよ。おまでもねとがせよさき
者ものとやうやく。心こころあきらめ下さまほし。つまゆもさう
財けい筋すじあくひま。心こころらすくあくびや下さまれ

爲くはしりけハア世あて細くナウヒとサア物と
この文、まえざまちをとひすれますまへトの事
て書うる傳ち、眉小八字の皺とよせイードニア
お見せまくりす。歟よも角おも合點のゆゑ
トおももと丁とらちもくひえ正の入、をと
取く引裂を仕口積りゆきゆくぬコレ侍まへお
もえんが方ハこうあり。吾俗も猪黒毛りくろ。ト言
もひよてどう極めサア是うふわまとの拘ごとく

考ぐく挨拶あいさつノ事こと。いつも主おも人ひとも貴不審きふしん人ひとを主おも人ひとだ
とよも合あうまつす。せの有情ゆじやうあるをその
事こと。お俊ひでが書かよ道理ぢぎりも事こと。そんある吾わ術じゆつ
指さしへよと狀じょうふ顔がほと巻まきえまきう。乃な全まつくそうそうべ
ござうませんせんがええ。そうであけあけやもやもやひひきひひきう。そ
切きらきききのとと男おとこらら。すすききとと言いふとと。そ
やしきのゆゆも実じつ取とりて。身みのまゝ生うれる更うつををねねぐ。
今いまテねねまま自じ小こ私わたくしああね。この場ばははああそそ。

言達いまだ。通つうもうちもあきまえう。やへますを
さあらは候まもりそ。実じつふわもあんかんが書かくあらま。もふふへ
仔細こまがとぎうませう。私わたくしも念ねんだらしどうぞすぐさま
もあんかんが住す所しょへ。ぢきまきれと下ささみが二に段だん論る
じその次つぎとト立たあづあづち。を待まとよと。駄だかけ
ぢくへらえぞ。ニ編ひんよくまうて委まく鮮あざべ

忠ただの花はな漆うすい初はじ編ひん下しも巻まき

江蘇作著

松亭全水

今畫工

貞齋泉冕

憶の花嫁

序二編二冊

山づき家政仕事の本

羨慕熟故香

ワタリの本

下毛

毛馬子

毛馬子

毛馬子

毛馬子

毛馬子

羨慕熟故香

ワタリの本

下毛

毛馬子

毛馬子

毛馬子

毛馬子

毛馬子

東都書房

本
松坂町

西村興八
平林庄五郎
版

毛利



